



『政治は奉仕なり。参政は権利にあらずして義務なり』

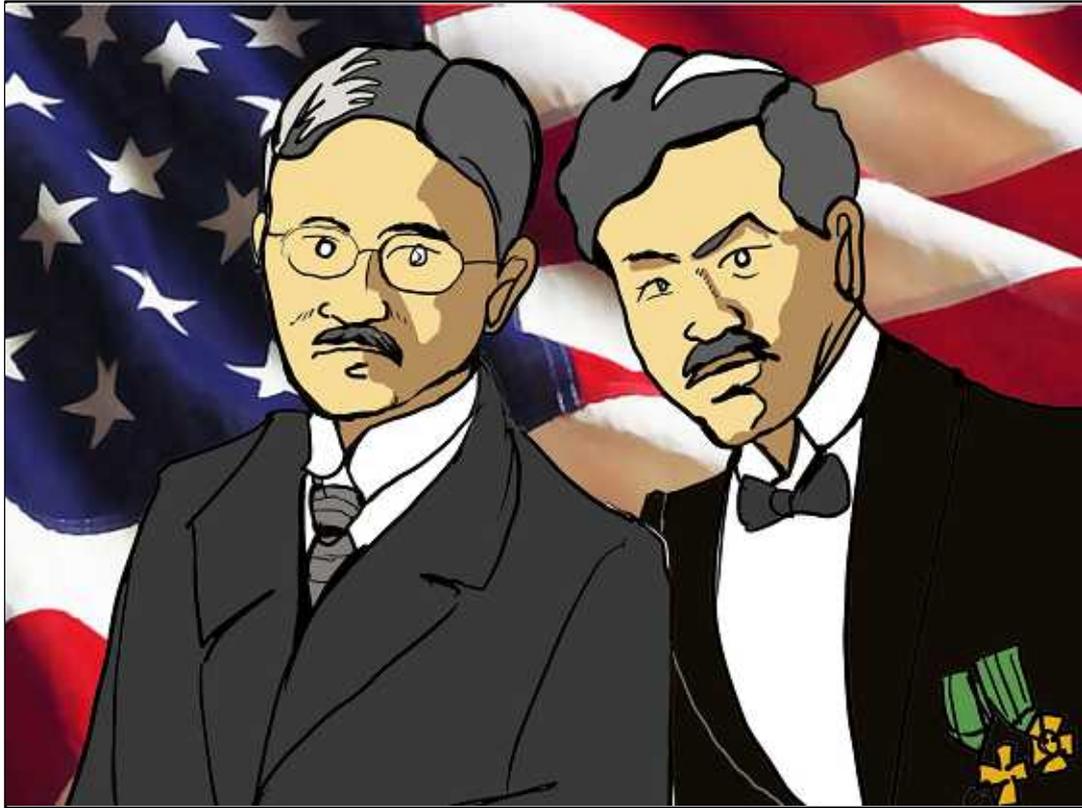
大正13年、福島県で、立候補者が選挙運動なのに、「清き一票を私に」と一切言わず、民主主義とは何か、選挙がどんなに大切か」と「選挙大学」を開いてまわった男がおりました。

なんと選挙ポスターにも肝心の立候補者の名前がないのです。そのかわりに獅子と旗を組み合わせた図柄に『政治は奉仕』と大きな字で書いてあるのです。

その名前なき立候補者こそ、「製薬王」と呼ばれた 星一という男です。



この男、明治6年といいますが1873年に福島県菊多郡前江栗村(ふくしまけんきくたぐんまええぐりむら)において村長の息子として生をうけました。星は厳格な父と母の優しさの中ですくすくと育ちましたが、幼い頃、遊んでいて右目を失明するというハンディキャップを背負ったのでございます。しかし、そのほかは頭脳明晰、勇猛果敢、とにもかくにも頭が良い少年でありました。



星は、アメリカに渡り、働きながら現地の小学校から学び始め、大変苦勞してついには大学まで卒業した人です。アメリカにおける野口英世との出会いから医療に強い関心をもつこととなり、日本に帰ってきてから、薬を作る会社、星製薬をたちあげます。その会社は日本で初めてのチェーンストア化を展開し大成功、東洋の製薬王とよばれる福島県出身の大実業家となります。



しかし時代は20世紀初頭、日露戦争に勝利したものの賠償金がとれず、政府への不満が増大。各地で暴動が起こり、結果戒厳令が敷かれるにまでに至り、戦争を指導してきた桂内閣は退陣へとおいこまれました。日露戦争でアメリカやイギリスから借りた外債を返すための資金に窮して日本は大経済不況に陥りました。その後、時代は明治から大正へと移り、富国強兵、世界の大国に肩を並べんとする日本の軍事費はうなぎのぼりに膨らんでいきました。



それに平行するように苦しくなるのが国民の生活です。大正12年には関東大震災により首都圏は壊滅状態。日本の経済はさらに厳しくなります。女工哀史の言葉が世に生まれ出たのも、この時期で女性の過酷な労働が社会問題化しはじめました。庶民の生活は苦しくなる一方、政治を変えねば、東北のみならず日本が危ないと多くの福島県民が白羽の矢を立てたのが、星一でした。



「星さん、この東北、いや日本を救うのはあなた以外にはいない。名も売れているし、金の準備もできる。それに演説もうまい。憲政会の立候補者に勝つために、ぜひとも政友会から立候補してほしい。」

「会社の仕事がとても忙しいんだ。全国の販売網をさらに強化しなければならない。各地方で特約店大会を開いて、講演をして回らなくてはならないんだ。」

「日本を救うためだ、家業は二の次だろう」

「そんな事をいわれても・・・」

「わかった、もう君には頼まん。我々は勝手にやる」

「勝手にやるとは・・・」

「君の了承が得られなくとも、我々は君を立候補者として選挙戦を戦う。君は表には出ず会社に閉じこもっている」



「そっそんな無茶苦茶な」

冗談のような話ですが、星に立候補を説得する者達、みんな真剣です。本当にやりかねない勢いです。弱った星は、二日後に答えを出す旨約束しその場を一旦解散しました。



二日後、星は条件をまとめ、皆にこう言いました。

「君たちは、私が立候補するなら、どんな条件でも飲むといったなあ」

「はっ、そのとおり」

「君たちがそこまで言うのなら、立候補してもいい。しかし、やるからには意義のある画期的なことをやりたいと思う」

「といううと」

「いままでの選挙のやり方を全て改める。とりあえず私はどの党にも所属しない。つまり無所属で出馬する」



「政友会の何がいかん」

「良い悪いではない党利党略のために政治はしようないのだ。勝敗は二の次、つまり政
党を超越し、選挙の範とならん選挙を実践してみたいのだ」

「そんな理想主義で……」

「ならばでない」

「わかったわかった。君のゆうとおりにしよう」

そんなこんなで奇妙奇天烈な選挙戦がスタートしたのでございます。



この時代の選挙、投票できる人は、直接国税を15円以上おさめている満25才以上の男性に限られていたので、全人口の1%の人しか投票できませんでした。物価は、もりそばが1銭、牛乳(1本)が3銭でした。これから今の物価で計算すると、当時の15円は、現在の60万～70万円ぐらいと思われます。また、投票できる有権者に、立候補者はたくさんのお金をばらまいて、自分に投票してもらうということが当然のことのように行われていた時代でもありました。



そんな時代に、星はお金を有権者にばらまかない、自分への投票も呼びかけないという選挙運動をやったのけたのです。

バン

「無所属はしかたないにしても、こっこんなバカげたポスタ があるか」

「どうした大声で」

「選挙参謀、みてくれ、これがポスターだというんだ」

「政治は奉仕！？なんだこりゃ」

「わたしもこれはないだろうと星さんに言いましたよ。でもこれで良いんの一点張りで話になりません」

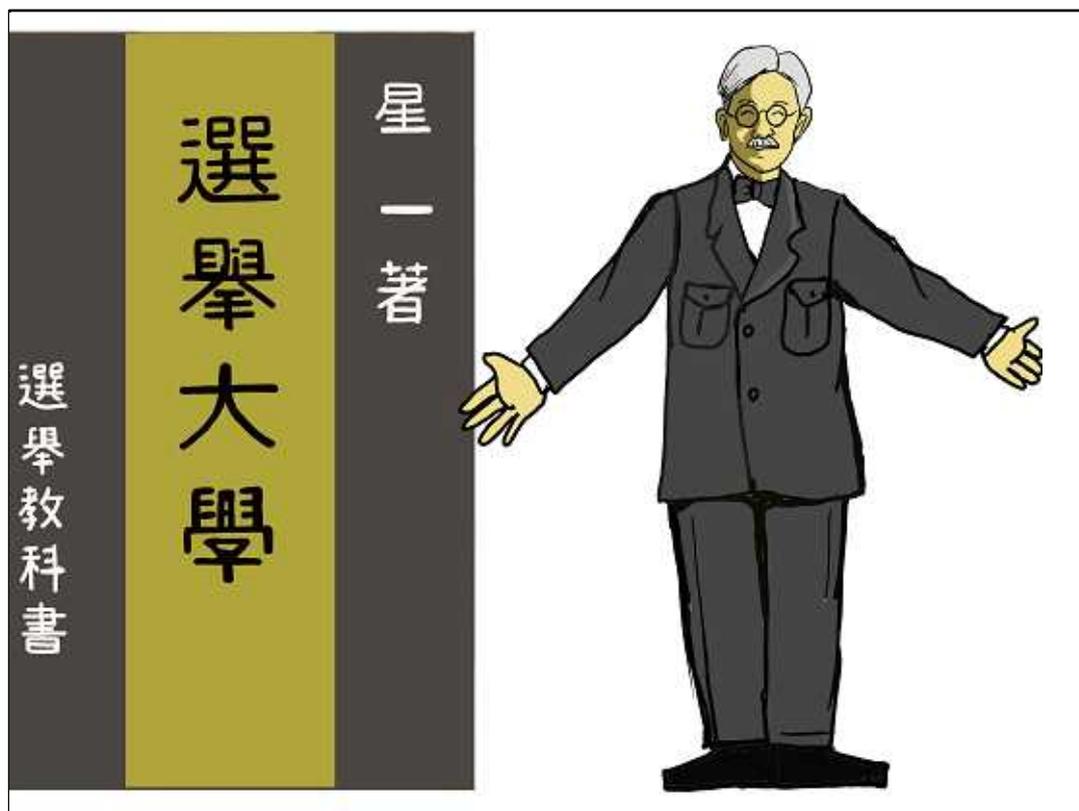
「それに…」

「なんだまだあるのか」

「選挙演説はしないそうです」

「立会演説会をしない！それでどうやって想いをつたえるんだ」

「大学を開校するそうです」



「だいが〜くう！なんじゃそりゃ」
「星さんは選挙演説会を行う代わりに一日だけの「選挙大学」を開校するそうです」
「選挙大学てなんだ」
「これが教科書だそうだ」
「先だって印刷にかけたパンフレットじゃないか」
「30ページほどあるんだが、下の段には余白があり、それぞれが話を聞きながら記入
できるような、ノート兼用の形になっているんだと」
「驚きはこれだよ」



「石城(いわき)郡の婦人へ?なんだこりゃ」
「それも選挙大学の教科書だそうだ」
「教科書って、女子は選挙する権利はないんだぞ」
「デモクラシちゅうやつです。これからは女性が社会を動かす時代になるそうです。そこで今回の選挙運動を通して、アメリカで学んできたことをもとにし、選挙のお手本を男女問わず実感してもらいたいんだとか」
「おなごに政治などできるか。こんなんで選挙戦は戦えんぞ。わしゃもう知らん」



そんな選挙参謀のイライラをよそに星は自らの主張を書いたパンフレットを持って警察や裁判所周りをしていました。

「本官は忙しんだ。わかったからもう帰れ」

「そんなことをいわずに、調べてくださいよ」

「いきなりポスターやパンフレットを持って、“このような主張でやるつもりだ。もし、不都合な点があったら、取り締まれなどといわれても、困るんだ。選挙前から取り締まれなどという訴えなんて、初めてだ。もういいから帰れ帰れ」



そしていよいよ一か所目の選挙大学が開講します。星の生まれた家のある近くでもあり、好奇心も加わったためでしょう。会場は菊田座という現在のいわき市植田町にある芝居小屋で五百人を越す観衆で満員になりました。

パンフレットに書いてある文章を、会場にいる全員で、朗読します。

「善良なる日本人は自国を知り、自己を知り自己を信じ、自己の責任を知り、自己の義務を果たします……」

と、こんな文句に始まって

「……自治は人類の本能にして、協力こそ進歩であります。」

と続けました。



20日間の選挙戦を選挙大学と銘打った選挙教育を軸として戦ったが、対抗馬である比佐昌平氏に、5106票対3188票と大敗を喫した。その選挙戦後、星は支援者の前で堂々と落選演説をおこなった。

その後、昭和12年、第20回衆議院議員総選挙で2回目の衆議院議員当選、昭和20年に第3回目の当選を果たし、政治は奉仕の信念のもと国政にたずさわったのでございます。

政治が職業化する中、今一度、星一が世に問うた「政治は奉仕」の言葉、今一度皆で考えてみたいものです。